

幕末維新期の宗像と志士 ― 徳重村・石松家出身の徳重正雄を中心に ―

竹川 克幸

はじめに

現在、私は『新修宗像市史』の近世部会長として、筑前国福岡藩領であった宗像の幕末維新期の歴史や、宗像ゆかりの幕末の志士について、彼らの書簡や日記などの古文書・記録史料や、宗像地域の郷土資料・文献資料を紐解き、『新修宗像市史』通史編執筆のために調査・研究している。

宗像ゆかりの幕末維新期の志士としては、遠賀郡虫生津村出身で、吉留村（現・宗像市吉武地区）の医師でもあった早川勇（養敬）が代表的な人物である。早川勇は月形洗蔵や加藤司書ら福岡藩の勤王の志士（筑前勤王党）の同志や、薩摩藩の西郷隆盛（当時は大島三右衛門・大島吉之助、西郷吉之助）、中岡慎太郎（早川勇の従僕の筑前人・寺石貫夫と変名、石川誠之助や大山彦太郎とも）らと交流、国事周旋に奔走し、五卿の西遷（筑前移転）や薩長和解の周旋に尽力した。また新選組の一員で、土方歳三を供養したという鐘崎出身の立川主税などもよく知られている。

唐津街道赤間宿には、薩摩藩の参勤交代の大名行列や西郷隆盛、加藤司書、中岡慎太郎、河井継之助ら多くの志士達が往来した。特に、西郷隆盛は元治元年〜元治二〇慶応元年にかけて、第一次長州

征討や五卿の筑前移転の周旋に際し、赤間宿に訪れているようである。

そして、世界遺産の「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の一つ・宗像大社中津宮、沖津宮遙拝所のある筑前大島（現・宗像市）には、西郷隆盛の同志であった福岡藩の勤王の志士・平野国臣が宗像大社沖津宮の普請方で赴任していたり、お由良騒動で脱藩した元薩摩藩士で平野国臣や西郷隆盛とも親交の深かった北条右門（木村仲之丞、後に村山松根、村山下総）や工藤左門（諏訪神社の神官、井上出雲守正徳、後に藤井良節）らが潜伏したり、坂本龍馬や中岡慎太郎らが船で寄港し、立ち寄った伝承もある。

今回は、早川勇や西郷隆盛、三条実美公ら五卿とも交流のあった、幕末維新期の宗像の志士、また明治期以降は、宗像郡からの最初の海外留学者、福岡県議会議員でもあった、徳重村・石松家出身の徳重正雄について紹介したい。

（1）徳重正雄について

筑前国福岡藩領の宗像郡徳重村（現・宗像市徳重）出身の幕末維新期の志士 徳重正雄のことについては一般にはあまり知られてい

ない。「草莽の志士」ともいうべき人物である。

彼の履歴・事績や人物像については『宗像郡誌』上巻の「履歴書」や『宗像市史』通史編第二巻、宗像出身の陸軍少将・伊豆凡夫による追悼文「徳重正雄君を懐ふ」（『宗像』第百号に掲載）、上妻国男『宗像人物風土記』、福岡地方研究会会長・石瀧豊美の玄洋社の研究（「草莽の留学」）などの文献資料に詳しい。それらの文献資料によれば、徳重正雄は元の姓を石松といい、弘化三（一八四六）年三月三日に生まれた。徳重村の庄屋・大庄屋を務めた石松家・石松伴六（休蔵）の嫡子で、三蔵、三郎平、泰次郎、正巳と称した。

徳重正雄は、幼少時より向学心が強く、習字・手習いや四書の素読など学問の素養があり、旧福岡藩士の源蔵の四書五経の講義を聴き、皇漢大部（和漢、日本や中国）の歴史を学んだ。また福岡藩の勤王の志士、月形洗蔵や早川勇に国学や国史、漢詩・漢文学などの学問の薫陶を受け、桜田門外の変を知って天下国家の時勢や国事周旋に目覚め、勤王の志を抱くようになり、日田の私塾・咸宜園にも入門し、天下の志士とも交流したという。早川勇の日記には「今日も徳重に行き」という記述もあり、徳重の石松家にも志士の往来があったようで、国事周旋に向けての談義も行われ、徳重正雄も次第に感化されていったのであろう。

文久二（一八六二）年に十七歳の若さで徳重村庄屋役を務め、翌文久三（一八六三）年依願退職したが、慶応三（一八六七）年には赤間村庄屋役を命じられ、明治二（一八六九）年八月まで奉職している。

若き日の徳重正雄（当時は二十歳で、石松泰次郎）は、赤間や太

宰府に滞在した五卿とも交流があったという。元治二（一八六五、慶応元）年一月〜二月、赤間の御茶屋に滞在した五卿の給仕役として父伴六と共に召し出されて一首の和歌に感懐を託し、三条実美公に勤王の志を披歴したという。後日、太宰府に移転した三条実美公より御札に絹布に書いて贈られた和歌「如何にして筑紫の海に寄る波の千重の一重に君につくすぞ」もあったという。この間に、五卿や早川勇を通じて、五卿の西遷の周旋のため筑前国福岡藩領の宗像赤間宿や太宰府などを訪れていた西郷隆盛に出会い、知遇を得たとも考えられる。

父伴六は、嫡子で一人息子の徳重正雄の歩みや出奔を引き止めようと勝浦村の名家・松ケ屋から嫁ヤスを娶ったが、二人に実子はなく、妻ヤスは夫が留守で不在の間も両親に孝養を尽くしたという。「結婚しても自分はいつどこで殺されるかわからない」という徳重正雄の申し出で、明治元（一八六八）年正雄の妹、娘のハルに遠賀郡出身の筋田要一を婿養子に迎え世継ぎとした。明治二（一八六九）年に徳重村の庄屋役を務め、以来戸長や村会議員、県議会議員など役職を歴任し、後の初代赤間町長になった石松要一である。

明治維新後は、その志のままに、明治二（一八六九）年に福岡藩を脱藩（出奔）し、薩摩藩（鹿児島藩）に游学し、西郷隆盛の紹介もあって藩校造士館の漢学寮に入学した。徳重に改名したのは鹿児島へ游学した頃で、『宗像人物風土記』によれば、鹿児島徳重神社に参詣した際に、郷里と同じ名前の神社に望郷の念を禁じがたく石松姓から徳重姓へ改め、徳重泰次郎、後に徳重正巳、そして徳重正雄と名乗ったという。

彼の父伴六宛ての手紙・書簡類によれば、鹿児島遊学中は、早川勇の影響もあってか、西郷隆盛や大山綱良（格之助）ら薩摩藩士と交遊を深め、薩摩藩（鹿児島藩）から学費や生活費を支給され優遇を受けたという。二人の親交の証として、徳重正雄には、西郷隆盛と大山綱良から送られた掛軸（石松家に所蔵か）があり、毎朝起伏する部屋に掛けて大切にしていたという（伊豆凡夫の追悼文「徳重正雄君を懐ふ」）。

明治三（一八七〇）年福岡藩に脱藩（出奔）の罪を許され、福岡藩の藩費で東京遊学のため上京。明治四（一八七一）年に外国語専門学校に入学し、ドイツ語を学んだ。明治五（一八七二）年に私費でドイツ・ハイデルベルクに留学、経済学者（経済学博士）のレッツ（チンゲル（レッツホニゲルとも）の塾に入り簿記や財政学、経済学（経済学）など実学を学んだ。またイギリス・ロンドンやフランスなど欧州各地を巡遊した。

徳重正雄の留学先から家族石松家宛に送られた手紙・書簡類（「石松家文書・明治七年正月一日・正月二日認」）には、「御区内（宗像）ニテハ鶏卵日本ニテ有名之地ト歟。一軒ニ付、鶏壺番（ツガイ）ヲ増飼ニテモ三四千ハ相増可申右一番一年ニ壺両ノ鶏卵代ヲ得ル時ハ則二千兩ノ益ナリ右之売捌ニ付鶏卵会所ノ如キ物決テ益トナラズ」など、宗像郡の特産物・鶏卵（宗像卵）の旧式の商人による鶏卵会所方式をやめて養鶏業・流通の近代化、鶏卵の増産による利益の拡大、経済の地域活性化を図る提案を行っている。また、茶、養蚕、蠶など日本からの輸出品の増大、麦酒（ビール）や羅紗（ラシヤ）など輸入品の国内生産の勃興・拡大、筑前米の酒生産加工への転用

による筑前や宗像の地域経済の活性化など日本の貿易や産業、地域経済に関する提案や、「産物・器械・財金のうち、国や郡、町村単位での人口や産物の繁殖が肝要である」や「器械人業（工業化）の勃興が肝要」などの記述もあり、彼が留学で学んだ経済学的な見地、近代的な富国論や殖産興業に対する具体的な提案・意見を述べている点は注目される。

ただ留学中に病弱になり、志半ばであったが、明治九（一八七六）年七月に帰国した。帰国後は秋月の乱、西南戦争などちょうど土族反乱の最中で、西南戦争の際は、西郷への恩義もあり病身ながら恩返しのため、頭山満・箱田六輔と玄洋社の三傑とうたわれた平岡浩太郎ら同志と図って西郷軍への応援も計画したり、福岡の変に参画しようとしていたが、計画が露見し、官軍の追っ手を逃れ、大阪の実業家の大三輪長兵衛に匿われたという逸話もある。

明治十一（一八七八）年、大阪で大三輪長兵衛が発起人として手掛けた大阪第五十八国立銀行の設立・開業に際し取締役として携わり、資本金の内六万円を福岡県で募集するなど大いに実績をあげ、同年十一月の開業から明治十三（一八八〇）年まで博多支店の事務を総括した。また、先述の石瀧豊美氏の玄洋社の研究によれば、明治十二年に結成された条約改正論を唱えた有志会議「筑前共愛会」にも参画し、同郷で宗像大社の神官を務め「博多新聞」を発行していた松田敏足と共に、会議への参加を勧誘するため筑前の各郡を周り、遊説している。

明治十三年から明治十七（一八八四）年にかけて、明治政府の官僚であった早川勇の庇護を受け東京府京橋区三十間堀の早川勇宅に

寄寓し、東京、箱根や熱海などで療養生活を送っていたようである。同郷で後の陸軍少将の伊豆凡夫の士官学校の入学に際し、身元保証引受人になったのも徳重正雄であった。また療養期間中の明治十六（一八八三）年に刊行された著書『為替手形約束手形条例註釈』などがある。著書奥付には「早川勇方寄留」とある。

明治十七年八月に故郷の宗像に戻り、明治十九（一八八六）年には宗像郡より福岡県議會議員にも選出され、福岡県庁より衛生会委員に任命されている。

明治二十（一八八七）年三月十一日、療養の甲斐もなく、福岡市内の病院の一室で四十二歳の若さでこの世を去った。

（2）徳重正雄の関係資料

徳重正雄に関しては、徳重村庄屋家の石松家伝来の古文書「石松家文書」（石松家所蔵、市史編さん室にマイクロ・紙焼き資料所蔵）に残る徳重正雄が留学先から家族・石松家に宛てた手紙、書簡類の他に、福岡県立宗像高校の資料館（四塚会館）には彼の海外留学時代の記録（徳重泰次郎書簡：英国龍動ロンドンからの訪英報告）が所蔵されている。

ここで参考までに、『宗像郡誌』上編に収録されている資料ではあるが、徳重正雄が福岡藩を脱藩後、鹿児島遊学時代の頃と時期と思われる徳重正雄と西郷隆盛の関係を示す典拠史料「徳重正雄書簡（年不詳正月三日付、明治二〜三年頃か）」を以下、紹介する。

「徳重正雄書簡」『宗像郡誌』上編 六一四〜六一五頁、原本は

徳重村「石松家文書」

春賀芽出度申上納候。舉家御揃、益御安康奉敬賀候、陳者私儀去十月朔日肥後熊本ニ而、市二郎と相別れ、七日當藩着、爾後西郷吉之助君相訪、段々懇情を蒙候末、漢學寮へ入門いたし度、依頼仕置候處、同廿二日許容ニ相成、直ニ入寮仕、都講久木山泰蔵と申仁より、被申談候二者、私篤志之次第被相感趣ニ而、滞塾中賄を初、夜具油火等迄、政府より御仕度被下候旨ニ付、余程辞退も仕候得共、押而断ニ及候而ハ却而不敬と存、其儘相受居候内ニも、不束之身分、痛入仕合、畢竟是と申も、西郷氏之厚誼、且藩法遊士を被相待之厚、實ニ感銘之至ニ奉存候。其刻迄ハ、佐賀熊本兩藩遊學生四人、余ハ當藩之人斗と同居仕居候處、舊（旧）蟬初旬より、本藩遊學生六人出浮之内、兩人當局へ入寮被致、何れも親睦ニ相交、専ら勤學、問二者参政桂四郎、黒田嘉納、大監察大山格之助君杯と申人を初、其外有名之仁等、相尋候而、議論等拝承いたし、至而健ニ消光仕居候間、乍憚御氣易ニ御思召可被為下候。

一、當藩政体变革上向、所謂日新之模様、就中も大事件ハ、門閥廢と申、万石已上御家門を初、諸大身不殘千五百石已下ニ被致減録（禄）、陪臣等も士族ニ取立ニ相成、貴賤之無差別、人才ニ応し、登用ニ相成候間、只今ニ而ハ家柄故就官之人杯ハ、壹人も無之趣、且又廢佛論ニ而、国中寺塔杯、無殘廢毀、法師等も還俗いたし候。就而ハ百姓町人ニ至迄、總而神祭葬之式、取用候趣、其外製鉄所、火薬局等、何れも高大之仕構、實ニ感嘆驚目、都合ニ御座候。先者右之段安否為御知申上置候條、必

御氣遣不被為下、節角御自重之程、奉願上候。已上

鹿子嶋藩（鹿兒島藩）

石松三郎平事 徳重正巳（正雄）

正月三日

石松休蔵様 ○伴六

（3）徳重村・石松家墓地と徳重正雄の墓碑について

令和元（二〇一九）年九月四日（水）に、石松家（石松孝義様の奥様石松シノブ様）のご案内で、宗像市史編さん事務局・花田事務局長・判田さんと文化財課山田さんの立会の下、徳重地区の石松家墓地と徳重正雄の墓碑の現地確認調査を行った。

石松家の墓地は、徳重地区の丘陵地で、太閤水伝説もある古い井戸跡が残る柳井尺にかつてあった禪宗（曹洞宗）寺院・宝松院の跡地にある。宝松院は石松家の祖先・石松三郎兵衛が寛永年間に開基した寺院で現在は廃寺になっているようである。石松家は戦国時代には宗像地域を支配した宗像氏に仕えた武士であったようである。江戸期は、徳重村の庄屋役（初期は触口）を務めた初代石松三郎兵衛から九代目の石松伴蔵、十代目石松伴六、十一代目の石松要一など石松家累代の墓や昭和十四（一九三九）年に開催された「石松家三百年祭」の記念碑「徳重石松家祖先之碑」がある。そして、徳重正雄の墓碑はさらに丘の上段部にあり、墓碑には「徳重正雄墓、明治廿年三月十一日序下没、福岡県議會議員有志中建之」とあり、福岡県議會議員の有志で墓碑が建立されたことがわかる。また「石松家文書」の中に、「故徳重正雄建墓費義捐者人名簿（明治廿年十二月）」

という墓碑建立の発起人や義捐金に関する資料が残る。

おわりに

最後に『宗像』第百号に掲載された、伊豆凡夫の徳重正雄の追悼文「徳重正雄君を懐ふ」が彼の人生を集約しているので以下、一部引用する。

「君をして長寿ならしめん乎。世豈君を要して立たしむるの時なからんや（中略）天道是乎非乎。何ぞ有為の土に幸ひせざるの酷（甚）だしきや」「余は我郷の、徳重君を妄評する人に告げんとす。成敗を以て人を論ずべからず、之を古今の歴史に徴せよ。志士皆悉く成効（功）を期するに能はず、偉人必しも大名を為さず」と徳重正雄の天折を惜しんでいる。

徳重正雄は、早川勇や西郷隆盛に薫陶を受け、イギリスやドイツなどヨーロッパへ海外留学して世界を経験し、日本を見つめ直した国際人の先駆者であった。また、同時期に渡欧し、ドイツ・ハイデルベルクに留学した鞍手郡出身の医師赤星研造とも交流があった。そして、郷土宗像の家族や未来を思い、経世済民（経国済民）の志を胸にふるさとを愛し、国事周旋に奔走した志士が宗像にもいたことを忘れないで頂きたい。この機会に徳重正雄のことを広く知って頂き、彼の生き様や人物像、その志を後世に伝えていきたい。徳重正雄や石松家の歴史や歴史資料については、宗像地域の近世・近代を解明する上で重要な事項であり、今後の調査研究課題である。

徳重正雄についての資料や情報について何かご存知の方がおられましたら、ぜひご教示、情報提供をよろしくお願いしたい。



写真2 徳重正雄の墓碑



写真1 徳重正雄肖像 (石松孝義氏所蔵)

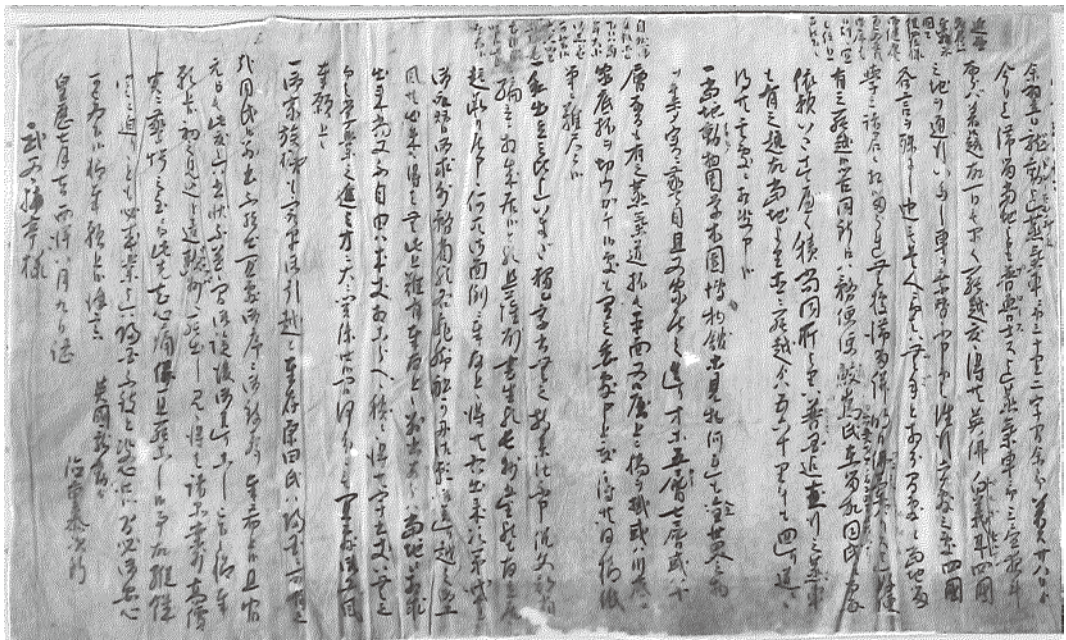


写真3 留学先からの徳重正雄の書簡 (宗像高校四塚会館所蔵)

参考文献

- 宗像市史編纂委員会『宗像市史』通史編第二巻 古代・中世・近世、宗像市、一九九九年
- 伊東尾四郎編『宗像郡誌』上編第4章人物、臨川書店、一九八六年
- 伊豆凡夫「徳重正雄君を懐ふ」『宗像』第百号、一九一五年
- 田中幸夫『郷土宗像』第三輯、福岡県宗像高等女学校校友会、一九三五年
- 上妻国雄『宗像人物風土記』一九六八年
- 宗像大社々務本局宗像編輯部「宗像」編輯部編『宗像史話伝説』一九六九年
- 江島茂逸『従四位早川春波翁来歴 完』一九〇五年
- 桧垣元吉『維新の志士 早川勇傳』宗像明治百年記念維新の志士早川勇顕彰会、一九六八年
- 栗田藤平『雷鳴福岡藩 草莽早川勇伝』弦書房、二〇〇四年
- 占部玄海・占部華生『黒田藩宗像出身勤王の志士 早川勇』權歌書房、二〇一六年
- 川口芳実・前山泉『マンガで読む維新の志士早川勇伝』維新の志士早川勇先生顕彰会・宗像市吉武地区コミュニティ運営協議会、二〇一八年
- 『宗像高校視聴覚ホール郷土資料・図版目録』福岡県立宗像高等学校図書館、一九八四年
- 占部玄海『郷土歴史資料叢書第一輯 五卿の西遷―早川勇とその群像―』文化企画蘿山房、一九八五年
- 赤間地区歴史・観光ガイドブック編集委員会『赤間地区歴史・観光ガイドブックつたがたけ』赤間地区まちづくり推進協議会、二〇〇五年
- 荒木康彦「ハイデルベルク大学の3人の初期日本人留学生」『大学史研究通信』大学史研究会、二〇〇四年

石瀧豊美『玄洋社発掘―もうひとつの自由民権―』西日本新聞社、一九九七年

石瀧豊美『玄洋社 封印された実像』海鳥社、二〇一〇年

葦津泰国『大三輪長兵衛の生涯―維新の精神の夢にかけて』葦津事務所、二〇〇八年

アクロス福岡文化誌編纂委員会編『アクロス福岡文化誌9 福岡県の幕末維新』海鳥社、二〇一五年

(付記)

本稿は、竹川克幸「時間旅行ムナカタ第81回 幕末維新期の宗像と志士 早川勇と徳重正雄」(『むなかたタウンプレスNo.354』、二〇一七年十二月十五日号)、同「時間旅行ムナカタP.L.S.No.11 幕末維新期の宗像と志士 続 早川勇・徳重正雄と志士たちの邂逅(かいこう)」(二〇二〇年二月)、竹川克幸「幕末維新期の宗像の志士 徳重正雄と西郷隆盛」『敬天愛人』第37号(公益財団法人西郷南洲顕彰会、二〇一九年)及び、令和元年度福岡県文化団体連合会・県民ふるさと文化講座「福岡の文化を創った国際人たち」第5回「宗像の国際人 徳重正雄」(令和元年九月十九日、アクロス福岡)の講演内容・資料を基に執筆した。

調査・執筆するにあたり、新修宗像市史編纂委員会事務局、宗像市文化財課、宗像高校四塚会館、福岡県文化団体連合会、公益財団法人西郷南洲顕彰会(西郷南洲顕彰館)、そして石松孝義様・シノブ様、「夫妻をはじめ、石松家の皆様が大変お世話になった。徳重正雄・石松家とのご縁と学恩に感謝し、改めて謝意を表したい。

(たけがわかつゆき 近世部会)